

タイ国近代化形成期における日本との仏教交流

ナワポーン ハンパイブーン*

The Buddhist relationship between Thailand and Japan in the age of modernization

Nawaporn Hanphaiboon*

Abstract

This paper is an attempt to explain the utilization of Buddhism in the Thai modernization period (the reign of King Chulalongkorn, 1868–1910), during which structural reforms in administration, education, legislation, and economy were implemented to foster the establishment of Thai nation-state against Western colonialism. As a part of such process, Buddhism was employed to strengthen diplomatic relations with powerful surrounding nations. It played a significant role in presenting the remote and quite unknown country Siam, or Thailand as later called, to the world as a highly developed nation possessing advanced technology and education. Particularly, with Japan which is also a Buddhist country, Thailand had used Buddhism to further develop and deepen their friendly relations through the donation of the Thai-script edition of the Tripitaka as well as a portion of the Buddha's relics to Japan. Lastly, this paper examines the process and effect of the utilization of Buddhism with Japan.

* 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程；Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University, Doctoral Degree Program

I. はじめに

本研究は次の二点を課題とする。第一に、タイ国¹が西欧列強の植民地主義の脅威、独立の危機に直面して、近代国家への改革を迫られた時代、すなわち、チュラーロンコーン王（ラーマ5世）期における国内制度改革及び対外政策における仏教の役割を明らかにすることである。第二に、これを基礎として、この時代におけるタイと日本との関係を、仏教交流およびそれが担った外交的役割という側面について明らかにすることである。

チュラーロンコーン王は、父のラーマ4世王が急逝したため、幼少にして王位を継承した。即位後、彼は内政問題のみならず、フランスとイギリスからの対外圧力に苦しめられた。西欧列強の植民地主義政策によって周辺諸国が次々に植民地化されたなかで、同王はタイが植民地化を免れるため、国家全体の近代的改革、国の文明化、および国民の統一の必要性を痛感した。彼は、財政制度の改革、司法行政制度の近代化、中央集権化、軍事の近代化、教育の改革、鉄道・通信・運輸制度の整備など経済的・社会的近代化の改革を次々と実行した。

とりわけ、絶対王権化、中央集権化、教育の近代化、国民の一体感の育成等のために、意識的に仏教を利用した。国王は、仏教によってその統治に正統性を与え²、仏教書籍の出版・配布、寺院の建設・改築、仏教学校の創立など、様々な仏教振興活動を実施し、国王と仏教を中心とした国家形成および国民意識の形成を図った。仏教はチュラーロンコーン王の改革政策において、極めて重要な役割を担うこととなったのである。

国内改革だけではなく、国王は対外政策を有利に展開するためにも、仏教を利用した。彼は、英仏両植民地国家に対しては、バランス・オブ・パワー政策、交渉による緊張緩和、条約締結による問題解決などで対処したほかに、より積極的には、西欧の仏教学者に対する経済支援、タイで印刷した三蔵の寄贈を行い、タイが文明国であることをアピールした。また、日本との間では、外務大臣テークウォンワローパコーン親王（以下テークウォン親王）が訪日して、1887年9月26日に修好条約宣言に調印し、正式に国交を開いた後、僧侶の受け入れ、三蔵、仏像、仏舎利の寄贈など、仏教交流を通して友好関係を強化した。

明治中・後期の日本には、東南アジアや太平洋諸島に進出して、植民すべきであるという「南進論」や東・東南アジア諸国の独立のためにイギリスとフランスの侵略を阻止すべきであるという「アジア主義」の考え方が生じ、タイに対する勢力拡大にも関心を抱き始めた時代であった。

日タイ両国関係の構築においては、仏教交流が大きな役割を担った。タイの仏教は南方上座部仏教（テーラヴァーダ Theravada）であり³、一方、日本は大乘仏教（マハー・ヤーナ

1 当時は、暹羅（シャム）と呼ばれていた。本稿では、引用文と条約名以外は現在の国名「タイ」を用いる。

2 仏教と王室の密接な関係がタイの特質である。国王の仏教擁護はタイ古代法典である「プラ・タマサート」中の仏教思想の影響である。タイの国王は、「プラ・タマサート」に基づき、仏法による統治を行った。「プラ・タマサート」は、国王は正法王であり、十種の王法（Rajadhamma 10：1.布施、2.戒、3.喜捨、4.正直、5.柔和、6.苦行者、7.無念、8.慈悲、9.忍辱、10.非妨害）を備え、五戒を常に保ち、仏日には八斎戒を守らなければならないと規定している。詳しくは、Dhani Nivat, H.H. Prince "The Old Siamese Conception of the Monarchy," *Journal of Siam Society*, Volume 36, Number 2, 1947, pp. 91-106、および石井米雄『上座部仏教の政治社会学：国教の構造』創文社、1975、pp.77-83 参照。

3 タイには、南方上座部仏教の他に、イスラム教徒、キリスト教徒、ヒンズー教徒、シーク教徒、山岳民族固有信仰の信者もいる。しかし、圧倒的に多数を占めているのは仏教徒である。2000年のタイ国政府統計局の宗教別統計（*The 2000 Population And Housing Census Whole Kingdom*, National Statistical Office, Office Of The Prime Minister）によると、人口60,916,441人のうち、仏教徒は57,157,751（93.8%）、ムスリムは2,777,542（4.8%）、キリスト教徒は486,840（0.8%）、その他は494,308（0.8%）である。

Mahayana) であるが、セクトの相違にかかわらず、1887 年の国交開始以来、現在に至るまで両国の仏教関係は、絶えることなく維持されてきた。2008 年に行われたタイから日本へのローマ字版三蔵の寄贈などのように見るように、仏教は現在においても両国の友好関係の維持・強化上、換言すれば、外交上の役割をもっていると言えることができる。

チュラーロンコーン王時代の仏教振興政策は、西欧列強のアジア植民地化という国際情勢のなかで、タイ国家の近代化や独立の維持政策とどのような関わりがあったのだろうか、また、仏教外交は、タイと西洋列強及びタイと日本との関係において、どのような役割を果たしたのだろうか。本稿は、タイ近代国家の形成及び同時代の外交における、仏教の役割を明らかにするものである。

本研究では、タイ国立公文書館 (National Archives of Thailand (以下、N.A.T.)) の未刊行一次資料、刊行された一次資料、および Bangkok Times などの同時代の新聞のほか、タイ語、日本語、英語の二次資料を用いる。

本研究の課題に近い先行研究としては次のようなものである。タイ・日本関係の全体像を対象とした論文としては、石井米雄、吉川利治『日・タイ交流 600 年史』、西野順治郎『日・タイ四百年史』、Edward T. Flood, *Japan's relations with Thailand: 1928-41* などが存在し、仏舎利の奉安など仏教関係の交流についても多少触れている。チュラーロンコーン王の国家形成時代について論じたものとしては、村嶋英治「タイ近代国家の形成」、吉川 利治「『アジア主義』者のタイ国進出：明治期の一局面」、Reynolds, Craig James, *The Buddhist monkhood in nineteenth century Thailand*, Stephen J. Zack, *Buddhist education under Prince Wachirayan Warorot*⁴ があるが、タイ・日本間の宗教関係には言及していない。佐藤照雄「明治後期の対タイ文化事業―稲垣満次郎と仏骨奉迎事業を中心として―」⁵は稲垣満次郎と仏骨奉迎事業を関係づけて、外交官稲垣の活動に論及している。本稿は仏教の外交的役割に焦点を当てて仏舎利奉迎を分析するものであり、佐藤論文とは重点が異なっている。

管見の限りでは、本稿の課題については、本格的な既存研究は未だ存在しないようである。

本稿の構成は以下のとおりである。第 1 節は、研究課題の背景と重要性、研究の目的、先行研究、研究方法、研究範囲を述べる。第 2 節は、チュラーロンコーン王を取巻く国内外の環境とタイ近代化の具体的な展開、そして近代国家形成過程における仏教が果たした役割について考察する。第 3 節は、東洋学研究への支援、諸外国への三蔵寄贈、仏舎利寄贈を取り上げて、対外政策として仏教の役割はいかなるものであり、いかなる成果が得られたかについて考察する。第 4 節は、国交開始後のタイ・日本関係、日本と不平等条約締結後の治外法権の諸問題と日本人僧侶の

4 村嶋英治、「タイ近代国家の形成」、石井米雄、桜井由躬雄編『東南アジア史 I』（新版世界各国史第 5）山川出版社、1999、pp.397-439
吉川 利治、「『アジア主義』者のタイ国進出：明治期の一局面（<特集>近代日本の南方関与）」東南アジア研究 16(1),1978, pp.78-93
Reynolds, Craig James, *The Buddhist monkhood in nineteenth century Thailand*., Dissertation (Ph.D.)—Cornell University. 1972
Stephen J. Zack., *Buddhist education under Prince Wachirayan Warorot*, Thesis (Ph.D.)—Cornell University, 1977
5 佐藤照雄「明治後期の対タイ文化事業―稲垣満次郎と仏骨奉迎事業を中心として―」『アジア太平洋研究科論集 19』、2010

普及活動について述べる。第5節は、仏舍利奉迎実態および仏舍利安置問題からみるタイと日本の関係を考察する。

Ⅱ．近代化国家形成と仏教振興活動

1．チュラーロンコーン王を取り巻く状況と近代化国家建設

チュラーロンコーン王は1868年15歳の時に王位を継承した。しかし、成人になるまでは、最有力貴族、ソムデット・チャオブラヤー・マハー・シースリヤウォン（別名チュアン・ブンナーク、以下シースリヤウォン）が摂政に就いていたために、自ら権力を発揮することはできず、単なる飾り人形に過ぎなかった。

即位時の状況について、同王は「自分が即位したのは15歳と10日で、母はおらず、母方の親戚はいても軽佻浮薄、そうでない場合でもまともな官職には就いていなかった。父方の親戚は皆自己保身のために汲々として、シースリヤウォンの支配下に置かれていた。役に立たない者ばかりであった。自分は若かったので、役割を果たすため、未だ十分な能力を持っていなかった」⁶と振り返っている。国王の力を抑制するため、シースリヤウォンはウィチャイチャン親王を副王に就任させた。従来、国王が自ら副王を選ぶ慣例であったなかで、シースリヤウォンは異例にも自ら副王を選任した。

ダムロンラーチャーヌパープ親王（以下、ダムロン親王）は、「シースリヤウォンは、国王と副王の仲が悪いことを知り、国王と副王両方を利用して、自分の地位を安定させようとした」⁷と、摂政の企みを説明している。チュラーロンコーン王（「後方王宮」と言われる）とウィチャイチャン副王（「前方王宮」と言われる）の関係は悪化し、ついに1874年に後方王宮が放火され、副王の私兵が後方王宮に侵入しようとした事件が生じた。これは、「ワンナー（前方王宮）事件」と言われる。失敗して身の危険を感じた副王は、イギリス領事館に逃れ、保護を求めた。イギリスまで巻き込み、内政干渉を招く可能性のある大事件に発展したのである。結局シンガポール総督の調停によって緊急事態は解決された。国王は1885年に、副王の死去を契機に、副王制度を廃止し、皇太子制を新たに導入した。

初期チュラーロンコーン王時代の政治勢力は主に、国王の改革派（Young Siam）、シースリヤウォンの保守派（Conservative Siam）、そしてウィチャイチャン副王の守旧派（Old Siam）の3つのグループが分立していた⁸。摂政シースリヤウォンを代表とするブンナーク一族⁹は、チャ

6 Chulalongkorn, King of Siam, *Prabaromrachowat nai ratchakarn thii 5* (*The King Rama 5's Speech*), Aksorasart publication company limited, 1966, pp.16

7 Damrongrachanuphap, Somdet phrachao boromwongthoe, *Pongsawadan krung ratthanakosin ratchakarn thii 5* (*Annals of Ratthanakosin era in the reign of King Rama 5*), Bannakarn, 1971, pp.123

8 第1グループは改革派で Young Siam と呼ばれ、チュラーロンコーン国王を代表として、国王の弟たち、エリート官僚、西欧教育を受けた青年貴族から成り、文明国を指向する国家改革の意欲を抱いた集団である。第2グループは、領袖のシースリヤウォンをはじめ、有力な貴族らから成り、急激な変化に抵抗し、できるだけ国を現状のまま維持することを好む保守派 Conservative Siam である。第3グループは副王のウィチャイチャン親王を中心とし、あらゆる変化が自分の立場と地位に影響することを恐れている官僚たちから成る守旧派 Old Siam である。(David K. Wyatt, *The Politics of Reform in Thailand: Education in the Reign of King Chulalongkorn*, New Haven and London: Yale University Press, 1969, Samudavanija, Chai-anan, *Kan Muang - Kanplianplang thang khanmuang Thai Po.So. 2411-2475* (*Politics-Political Change in Thailand between 1868-1932*), The Social Science Research Association of Thailand)

クリー王朝のラーマ1世王以来、兵部省、財務（含む外務）省、農務省など政府内の重要なポストをほとんど独占し、チャクリー王家に対抗できるほどの勢力を有していた。この勢力を抑制するため、チュラーロンコーン王は、成人に達し一時出家の後、1873年11月16日に、第2回即位式を行った。これには、国内外に国王の存在を明示して、摂政のシースリヤウォンから政権を取り戻そうという意図があった。この後、シースリヤウォンの権勢は低下し、ヨーロッパ諸国は国王と直接交渉するようになった¹⁰。また、国王が自ら出家をしたことで、仏教を信仰し、正法王になる意思をタイ国民に示すことができた。

ブンナーク家は長年政府内の枢要地位を占めたため、政治的勢力のみならず経済的にも実力を蓄積していた。国王が税制改革に着手する以前の徴税は、徴税請負人が国にかわって徴収していた。徴税請負制度の下では、徴税請負人がブンナーク家をはじめとする有力貴族と結びつき、国民からの税金を着服することが容易であった。税金は徴税請負人が横取りし、さらに各官庁の有力者が私的な利得のために、独自に税額を決めていたため、国民の納めた税金は一部しか国庫に入らなかった。そのため、ラーマ4世王の葬儀以来、国家財政は赤字で苦しんだ¹¹。

国力は国家歳入の規模によると考えたラーマ5世王は、税の集中を目的とし、1873年に新しい国家歳入法を公布し、国家歳入局を設立した。5世王が進めた税制改革は、ブンナーク一族から経済力を奪い、近代国家への財政基盤を作ることに成功した。翌1874年には国王は、重要な国務について助言する組織として国政参議会(Council of State)と、国王の相談役として枢密院(Privy Council)を設置した。両制度の狙いは、各省庁を握り行政上に絶大な権力を有する有力貴族の権力を、立法諮問組織を作って牽制しようとしたものであり、国王への権力集中計画の一環であった。しかし、諸改革を急ぎすぎたチュラーロンコーン王は、既得権益をもつ有力貴族から激しい反発を受けることとなった。それ故、絶対王制を目指した権力集中をスローダウンせざるを得なくなった。

国王による改革はウィチャイチャン副王とシースリヤウォン摂政の勢力を、経済面でも政治面でも弱めることができた。しかし、国王が実権を掌握し、本格的な改革の実行が可能となったのは、1882年にシースリヤウォンが死去した後であった。

実権をようやく握ったチュラーロンコーン王は、分権的政治体制では国王の権力は、中央地方を問わず、限られていることを実感し、1892年に国内行政を中央集権化する改革を行った。すなわち、相互に独立性が高く、重複した機能を持っていた既存の6省¹²を12省¹³に再編した。

9 政府内の重要なポストを独占したブンナーク家の代表的な人物として、未成年時代のチュラーロンコーン国王の摂政に就いたシースリヤウォン、兵部省を統括した、その息子のスラウォンワイヤット（ウォーン・ブンナーク）、財務省（含む外務）の弟のパヌボン・マハーゴサーティパディー（デューム・ブンナーク）、そして孫にあたる農務省のアハーンバリラック（ヌット・ブンロン）などを挙げることができる。

10 Sathuan Suphasophon, *Phra phutthasasana kub phra mahakasat thai (Buddhism and Thai Kings)*, Klung Vitthaya, 1962, pp.229

11 Chulalongkorn, King of Siam, Wachirayan Warorot, Somdet phra maha samanachao kromphraya, *Phra ratcha hatthalekha phra baat somdet phra chulachomklao choa yui hua song mee pai ma khab somdet phra maha samanachao kromphraya wachirayan warorot (The Royal writing between King Chulalongkorn and Prince Wachirayan)*, Sophonphiphatthanakorn Publisher, 1929, pp.224-228

12 ラーマ5世王が中央集権型の統治体制を導入する前は、南部地方を統括する兵部省（カラーホーム）、北部地を統括する内務省（マハートタイ）と首都（ウィアン）、宮内（ワン）、大蔵（クラン）、農務（ナー）の計6省がそれぞれ独立した機能と権限を持っているため、中央政権が介入できる余地がほとんどなかった。

各省の業務を明確化し、その長を国王自らが任命した。長である大臣の大半が王族であったことは、国王及び側近の王族に政治権力が集中したことを意味する。

国王は、また地方行政の改革も進めた。それまで地方領主が有した統治権を、内務省を設け中央集権化した。国王は全国を 19 州（モントン）に再編して、州の長を中央から派遣する、ターサーピバーン制を新設した。

これによって従来特権をもっていた地方領主は、政治権力、経済力を喪失することになった。そのため、東北地方ではピーブンの反乱（1901-1902 年）、北部ではムアン・プレーのギョウ（エン）反乱（1902 年）、南部ではプラヤー・ケーク反乱（1902 年）などの反乱が生じた。その外にも、チェンマイ州とパッタニー州では、中央から派遣されて来た役人と在来領主との間に衝突が発生し、中央政権への反感が表面化した。

地方の中央集権化は、無能な地方領主を排除し、彼らが地方の経済的利益を私物化することを終らせた。中央および地方行政の効率は向上した。また、官僚や地方領主の権力基盤となってきた平民と奴隷を解放した。国王は教育制度を近代化し、官僚及び平民のための学校を整備し、有能な人材を確保することを目指した。

2. 仏教の近代化とタイ国民国家社会の形成

サンガ統治組織の中央集権化、仏教による啓蒙、サンガによる教育など、宗教面での近代化も、チュラーロンコーン王は数々の改革の中の一つである。国王は国家近代化の一環として仏教を近代化させる必要性について次のように述べている。「私は、国の発展と仏教の擁護、すなわち国家と仏教の両方を繁栄させる義務があると痛感した¹⁴」、と。国王に仏教の改革の必要性を痛感させたのは次のような内政上の理由が指摘できる。

第 1 に、チュラーロンコーン王の仏教改革は、仏教の浄化に取り組んだ父ラーマ 4 世王（モンクット王、1804—1868 年）の意思を継承したものと考えられる。ラーマ 4 世王時代に、西洋に門戸を開いたときに、タイは西欧列強の植民地主義の脅威のみならず、キリスト教伝道師たちによるキリスト教布教および仏教批判という問題にも直面した。医学と印刷技術をタイに導入したブラドレーというプロテスタントの宣教師は「ヨーロッパ諸国を見よ、以前はキリスト教を信仰していなかったが、バイブルを受け入れた後、学問各分野における知識が顕著に増大した。タイが暗闇のままでいるのは仏教の聖典のせいである¹⁵」と、述べ、国の発展はキリスト教受容にあると主張した。一方、キリスト教の普及と仏教の衰退に危機感を抱いたラーマ 4 世王は、パーリ語原典へ回帰し、厳重な持戒を重視した合理的な仏教の一宗派、タンマユット派（タンマユット・ニカーイ）を創設した。彼は仏教こそが東洋文明の真髄であると考え、キリスト教の伝道と対抗した。ラーマ 4 世王の西洋文明受容は選択的であり、仏教と伝統文明の維持・強化に努めた。チュラーロンコーン王は、父王が行った改革を引き継いで、さらに推進したということができる。

第 2 に、国王が仏教の近代化に着手した当時は、官僚及び国民の行動は仏教の教えから遊離し、

13 専門機能別に再編された 12 省とは、国防省、外務省、大蔵省、宮内省、京畿省、建設省、文部省、農商務省、法務省、国防省、内務省、国王官房省である。

14 Chulalongkorn, King of Siam, *Phra ratcha damrat nai phra baat somdet phra chulachomklao choa yuu hua* (Po. So. 2417-2453) (*Speeches of King Chulalongkorn between 1874-1910*), Krom Sinlapakon, 1915, pp.115

15 *The Bangkok Recorder Vol.1 No.18, Nov 18th 1865*, pp.113

官僚の汚職、僧侶の破戒など不正行為が多発していたという社会的な背景がある。国王は、当時のタイ社会について「地方裁判においても首都裁判においても、以前と比べて嘘をつく人が増えた。今日不正な行為が多発しているのは宗教に対する意識が低下しているからである¹⁶」と述べている。一般人のみならず僧侶にも、飲酒、兵器所持などという破戒・犯罪行為が見られた。特に1885年にマレー半島各地で暴動を起こした犯罪組織のリーダーのほとんどはタイ人の僧侶であった¹⁷。その対応策として、政府は住職に僧侶の行動の監視及び破戒行為を処罰することを命令した¹⁸。

第3に、チュラーロンコーン王は、近代化のニーズに対応できる能力ある人材が欠如しているので、国民教育の普及が緊急な課題だと痛感した。そのため、宗教改革と同時に、教育改革にも乗り出した。チュラーロンコーン王は、僧侶を教師と使う意図をもって、まず僧侶教育の改革に着手した。すなわち、仏教と世俗知識を全国各地に普及できる僧侶の育成機関として、1889年に、バンコクのワット・マハータート寺院境内にマハーニカイ派のマハーチュラーロンコーン仏教学院、1893年にワット・ボーウォンニウェート寺院境内にタンマユット派のマハーマクット仏教学院を創設した。さらに1898年11月11日には、「全国の地方教育整備に関する布告」¹⁹を公布し、僧侶を教師とした国民教育を本格的に開始した。同時に公定教科書を出版して、全国各地に派遣する僧侶の教育普及活動に使わせた。教育改革にともなって学校施設などインフラ整備が必要となったが、国王は各地にある寺院に改造・増設を加えて教育施設に転用したため、建築費用の負担は少なく、一般庶民への教育を早期に拡大することできた。また、国王は「教育から寺院を外してはならない。一般教育だけでは不完全であり、宗教面の教育・啓蒙を強く望む²⁰」として、教育と並行して仏法の啓蒙活動の必要性を強調した。一般教育普及と同時に国民のモラル向上を推進した。

第4に、人民が、愛国心や、タイ人であるという民族意識さえ欠いている状況を克服することは、国民統合上における最も緊急な課題であった。タイでは、不平等条約により多様な諸民族が、英仏などの治外法権に守られて存在し、そればかりかタイ族までもが有利な外国籍を取得しようとする傾向が存在した²¹。民衆ばかりか官僚貴族にも外国に依存しようとするケースもあった。前述のワンナー事件の際には、身に危険を感じた副王がイギリス総領事館に駆け込み、イギリスの介入に期待し、国王の説得に耳をかさなかった。その時、国王は外国に依存しようとする副王の愛国心の欠如に憤った²²。そのために、国王は愛国心を啓発し、タイ人であるという民族意識を高めることの必要性を痛感した。

16 タイ国立公文書館(N.A.T.), R5.Mo2.11/2

17 1876年にラノーンとプーケットで反乱を起こしたアン・ジー(Ang-Yi)という中国系の秘密組織を真似て、1885年にタイ人が結成した犯罪組織「ギー・ヒン・ファ・クワイ」がタイ南部各地でみかじめ料徴収などの恐喝行為や強盗事件を起こした。詳しくは Damrongrachanuphap, Somdet phrachao boromwongthoe, *Nithan borankadee (Ancient Stories)*, Krang Witthaya, 1958, pp.349

18 詳しくは Sathian Lailak et al. ed., *Prachum kotmai pracam sok (Annual Collection of Laws)*, vol.11, Daily Mail Print House, 1934, pp.255-258

19 Sathian Lailak et al. ed., *op.cit.*, vol.16, pp.414-417

20 タイ国立公文書館(N.A.T.), R5.So.12/7

21 村嶋英治、「タイにおける国民国家、歴史と展望」、西川長夫編『アジアの多文化社会と国民国家』、人文書院、1998、pp.105

22 村嶋英治、「タイ近代国家の形成」、石井米雄、桜井由躬雄編『東南アジア史Ⅰ』（新版世界各国史第5）山川出版社、1999、pp.402

国王は、仏教こそが国民を統合し、西欧列強の侵略に対抗するためのナショナリズム形成に欠くことができないものであると認識した。しかし、仏教界には改革すべき諸問題が山積していた。そのため国王は、次のような改革に取り組んだ。まず、サンガの秩序をつくり、僧侶の管理体制を強化するために、1902年にラッタナコーシン暦121年サンガ統合法を制定し、従来独立していた僧侶をいずれかの寺院へ所属させて、国の管理下に置くこととした。また、同法により「マハーテーラサマーコム」と呼ばれる大老長会議がサンガ組織を統括する最高機関として設けられ、その下には大管区（カナ・ヤーイ）、州管区（カナ・モントン）、地方管区（カナ・ムアン）、地方区（カナ・クウェン）からなる段階的なサンガ支配構造²³が編成され、中央集権型のサンガ統治体制の基盤がつくられた。さらに、大長老会議の長である法王は国王が任命することにし、サンガは王権の支配下に置かれた。これによって、世俗的にも仏教的にも国王を中心とする中央集権化体制が確立した。

国王はワチラヤーン親王（1859～1921年、ラーマ4世王の第47番目の王子）を法王に就任させ、仏教の普及および国民教育の普及を託した²⁴。ワチラヤーン法王は仏法の説法、教科書、カリキュラムなどを通して中央政権の方針を浸透させ、中央集権化及び国王を中心とした絶対王制国家の形成に大きな役割を果たした。たとえば、同法王はピサヌローク州の説法では「州長、郡長、村長は部下に慈悲をもって接すべし、部下に、直接の上司から国王に至るまで忠誠と尊敬を生じさせよ²⁵」と述べ、スコタイでは「国家統治体制に奉仕することは法令を犯さず、国のために働き、税金を納めることである²⁶」と地方役人、住民に説いた。一方、サンガには学校教育の教科書、比丘と沙弥には説法と經典のマニュアル、そして民衆には經典、仏伝、雑誌「タンマ・チャック・ス」²⁷などの媒体を使って、仏教を普及し、仏教によって国民の団結意識を作り、仏教と国王を中心とする国民統合を目指した。

国王は、仏教に関する書籍の出版・配布、仏教施設の改造建築、仏像の製作・修復など仏教の振興活動を通して、仏法に従う正法王であるという国王イメージを国民の間に浸透させ、国王に対する忠誠意識を高めることで、国王による統治体制を強化することに努めた。

1893年の即位25周年祝賀式典の記念として、1888年から世界初のタイ語版三蔵を1000部出版して、全国の寺院に配布する計画を始めた²⁸。チュラーロンコーン王は三蔵の純化、出版を担当する僧侶に対して「仏教がタイに伝来して以来、今回のように多数の三蔵が存在したことはなかった。また、どこの仏教国においても、国王が三蔵1000部を作るために寄進した前例にないだろう。私自身とシャム国に最善の報いがあることを願う²⁹」と語り、仏教の擁護者の立場を示

23 詳しくは石井米雄『上座部仏教の政治社会学：国教の構造』創文社、1975、pp.148-152 と Sathian Lailak et al. ed., *op.cit.*, vol.18, pp.399-401

24 タイ国立公文書館（N.A.T.）, R5.So.To.47/26

25 Wachirayan Warorot, Somdet phra maha samanachao kromphraya, *Rayathang somdet phra maha samanachao kromphraya wachirayan warorot sadet truad kan khana song fai nua po.so.2457* (Visiting sangha in northern area of Prince Wachirayan Warorot), Ongkan Kha khong Khurusapha, 1961, pp.10

26 *ibid.*, pp.100-101

27 マハーマクット仏教学院は仏教普及のため「タンマ・チャック・ス」という雑誌を、1894年10月の創刊号から現在に至るまで発行し続けている。「タンマ・チャック・ス」はタイ最古の仏教雑誌である。

28 Sathian Lailak et al. ed., *op.cit.*, vol.11, pp.192-195, 196-201 とタイ国立公文書館（N.A.T.）, R5.So.19/4

29 *op.cit.*, vol.11, pp. 194

した。

タイは仏教およびサンガ組織を積極的に利用して、タイ近代国家の形成を試みた。仏教とサンガはタイ国家近代化、国民国家形成に多大な役割を果たしたといえることができる。

Ⅲ. 諸外国との関係と仏教の役割

1. 東洋学研究の後援

タイは西洋列強の植民地主義の脅威への対応政策として、タイ国内の改革のほかに、外交的な手段にも意を注いだ。チュラーロンコーン王は諸外国との外交方針について「強力な敵を抑制するためには、現在のように話術の力で戦うべきではない。我々は事件が発生する度に、議論で解決しようとしているが、議論で勝った場合でも損も得も得られない。議論がうまくいかない場合は、我々は損するばかりだ。(略)また、武力だけで戦うべきでもない。唯一当てになるものは「善行の力(Amnaat Kwam Dee)」、すなわち我々の良き行いと、国造りの努力の姿を、世界に見せることなのだ。迫害を受け、奪い取られたり、状態が悪化することがないように、だれかが介入して助けてくれるように³⁰⁾」と記している。要するに国王は外交交渉や軍事的手段などを使って、独立を確保することは有効な手段とはなり得ないと痛感し、タイの素晴らしいところを明示することで、タイという国の存在を世界に知らせるという方策を採ったのである。

国王が提唱した「善行の力」は次のようなことが考えられる。第1に、上記したように国の文明開化を推進し、国家の諸制度を整備して近代国家へと脱皮させるといった国づくりの努力が挙げられる。第2に、“My sincere desire is now to consolidate my peaceful and friendly relation with all other states, and especially with my two great neighbors...”³¹⁾と国王がロシア皇帝宛手紙で書いたように、諸外国との友情と平和を求める態度を示して、友好関係を構築する誠意を見せることである。国王のヨーロッパ外遊がその一例である。国王は1897年の外遊を経て、遠く離れた西洋諸国に好印象を与え、世界に唯一存在する独立仏教国家の国王として知られるようになった。第3に、欧米国と対抗できる文化的伝統、精神文化を持っていることを示し、タイ国の威厳を見せたことである。チュラーロンコーン王は、仏教こそがアジア文明の真髄であり、西洋文明に匹敵する人類の知恵であることを示そうとした。これは父王ラーマ4世王の意図を継承したものであった。

本稿では、①ヨーロッパの東洋学者への後援、②世界の有名な教育機関への三蔵経寄贈、③仏舎利分与を取り上げて、タイ国の仏教寄進活動とその成果を考察する。

19世紀後半は、ヨーロッパとアメリカにおいて東洋学が興隆し、仏教への関心が生じた時代である。ヨーロッパ各国において仏教に改宗する者が現れるようになった。仏教研究協会が設立され、仏教関係の出版物が多く出された。仏教ブームは「莫大な費用をかけてもアジアの無知な人々の間に数百人の改宗者しか得ることができなかったキリスト教と違って、仏教は、宣教師による教化、改宗の強制、プロパガンダもなく、アメリカのエリート層の間に急速的に広まった。

30 Chulalongkorn, King of Siam, Phra Sadet Surentharathibodhi, Chao phraya, *Phra ratcha hatthalekha lea nangsuu krab bangkom tun khong chao phraya phra sadet surentharathibodhi ro.so. 113-118 (The royal writing and the letter from Chao Phraya Phra Sadet Surentharathibodh 1894-1899)*, Siwaporn, 1961, pp.82-83

31 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. To.7/102

同国の仏教徒は既に何千人も存在しており、他宗教よりも急速に増大している。(略)仏教の教えを受け入れた現代哲学の精神主義者の数は数十万人も及んでいる³²」といった状況であった。

西洋の仏教ブームは、仏教は合理性、客観性、そして科学性を持ち、現代思想と合致している宗教であり、キリスト教と同等もしくはそれ以上に優れた宗教である事実を、西洋諸国に理解させる絶好のチャンスであった。さらに、東洋学者・哲学者の間に、資金面や学術的な面での後援を通じて、まだ世界に知られていないタイという仏教大国を宣伝し、タイ国への良好なイメージを作る機会であった。

チュラーロンコーン王はヨーロッパにおける仏教教育や、著名な仏教研究学者に積極的に経済的支援を行った。国王はイギリスの東洋学研究リス・デヴィッド (Thomas William Rhys Davids, 1843—1922) のパーリ文献翻訳事業に 500 ポンドを寄付した³³。リス・デヴィッドはヨーロッパのパーリ語研究協会の大物であり、世界に仏教を注目させた貢献者でもある。彼はパーリ語・英語辞典編集のほか、1881 年ロンドンにパーリ文献協会 (Pali Text Society) を設立し、パーリ語三蔵の出版のイニシアチブを取っていた。彼の企画は、経済的困難に直面したが、この時、同王の支援を得ることができた。また、東洋学者マックス・ミュラー (Friedrich Max Muller, 1823—1900) の『東方聖書』(Sacred Books of the East) の翻訳と刊行に 1200 ポンドを支援した。マックス・ミュラーは国王の協力について次のように述べた。“I am entirely given up to literary work, chiefly to the translation of the sacred of the East and to new edition of my own book. This morning I received this autograph letter from the King Siam, in which he encloses an order for £1200 to enable me to carry on the translation of the Sacred Books of the East”³⁴。同書にはシャム国王陛下の支援により出版されたと明記された。リス・デヴィッドがマックス・ミュラーの翻訳と刊行を引き継いだ時も、国王は 200 ポンドの支援を提供した³⁵。その他、オクスフォード大学のサンスクリット学者アーサー・アンソニー・マクドネル教授 (Arthur Anthony Macdonell, 1854—1930) の研究に 1000 ポンド³⁶、オクスフォード大学の東洋学スカラーシップの設立に 100 ポンドを寄付した³⁷。

国王はヨーロッパの仏教研究教育の促進に、経済的な支援をただけではなく、仏教に功績を残した人物に名誉を与えることも行った。イギリス詩人エドウィン・アーノルド (Sir Edwin Arnold, 1832—1904) の著作『アジアの光り』(The Light of Asia) は、仏陀の生涯と教えを描いた韻文であり、世界的に高い評価を受け、反響をよんだ。タイ政府は「チュラスラポー (Chulasurabhorn, Grand Officer of the Most Honorable Order of the Crown of Siam³⁸)」という勲章を与えた。

タイ当局はすべての著名な学者に援助を行ったわけではなく、ケース・バイ・ケースで判断した。1899 年、在ベルリン公使プラヤー・ノントブリーは文部大臣プラヤー・パーサコーラウォ

32 *The Bangkok Times*, June 2nd, 1888, pp.3

33 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. To.2.1/2

34 *The Bangkok Times*, July 4th, 1894, pp.3

35 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. To.2.1/25

36 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. To.2.1/23

37 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. To.2.1/21

38 *The Bangkok Times*, Sep 26th, 1900, pp.2

ン（以下、パーサコーラウォンと略す）に、タイは仏教文明が栄えている仏教大国であることを宣伝することができるので、タイで仏教の勉強を希望したカール・オイゲン・ノイマン博士を受け入れることを提案した³⁹。カール・オイゲン・ノイマン博士は欧州における仏教研究の先駆者の一人である。パーサコーラウォンは「タイを仏教大国としてアドバタイズをすることには賛成するが、年間費用 400 ポンドと交通費を計算して 2 年間で約 1000 ポンド以上を要し、高額過ぎること、シャムの学問をアドバタイズするほどの成果は得られないこと、在家者として来タイするのであれば、出家者同士の交流によるメリットは得られない⁴⁰」という見解を示した。国王は「ファラン（欧米人）の出家者は信用できない⁴¹」という見解であった。一方、1900 年に初代駐日タイ公使のプラヤー・リッティロンロンナチュート（以下リッティロンと略す）を通して、日本人がタイ国で出家を希望したケースがあった。リッティロンは「コダマという貴族議員が息子コダマ・ケイノスケを連れて、バンコクへ仏教留学を申し出た。（略）タイ公使が日本に赴任して以来、始めて上流階級（華族）の日本人からの依頼であり、国務に多少関係があると考えため、公使として依頼を受けるべきであると考え⁴²」と積極的な態度をとった。国王は「良いことである。ファランが出家するような嫌悪感はない⁴³」と回答した。結局、彼はバンコクのワット・ピチャイヤート寺院のプラ・タマトライローカ僧侶の下で仏教の修行を受けることとなった。国王は日本人の修行を認めた理由について、「日本人が勉強熱心で、仏門に入ることが本気なのは信じることができる。良いことなので嫌う理由はない。日本はアジア人同士であり、口だけ仏教を信じているファランと違って、日本には仏教を信仰している人も多い。タイで出家した日本人に知識を与えることができる教師の選択が重要であるが、プラ・タマトライローカ僧侶のような有能な人なら、うまく教えられると思う。（略）また、ウィハーンキッチャーヌコーン僧侶のところにも領事の依頼で日本人の沙弥修行を受け入れたことがある⁴⁴」と述べている。国王は日本人がアジア人同士で、仏教信仰の仲間だと考え、日本人修行者を暖かく歓迎した。南方上座仏教の普及も考えてのことであろう。

2. 三蔵の出版と外国寄贈

タイ政府は国内外の有名な教育機関の図書館に仏教文献を寄贈する政策を展開した。その文献の中で世界の注目を集めたのはタイ文字版パーリ語三蔵である。このタイ文字版パーリ語三蔵の純化・出版は国王即位式 25 周年祝賀式典を目途として、1888 年に着手したプロジェクトである。正確で完成度の高い三蔵を大量に出版するために、仏教の教法に関する知識水準の高い僧侶と専門家のチームが結成された。このため、ワチラヤーン親王をはじめ、地方各地の管区長および国家教法試験合格者（パリエン）のエリート僧侶や、修行している王族官僚合計 110 名が三蔵純化を実施するチームとして組織された。また、三蔵の出版及び三蔵完成の式典を実施するために、パーヌランシー親王、ダムロン親王、パーサコーラウォンをはじめとする王族官僚の在家者からなる「カンマサンパティッカサパー」三蔵出版委員会が設置された⁴⁵。

39 タイ国立公文書館（N.A.T.），R5. To.2.1/9

40 同上

41 同上

42 タイ国立公文書館（N.A.T.），R5.To.22/19

43 同上

44 同上

45 Sathian Lailak et al. ed., *op.cit.*, vol.11, pp.198

国王即位 25 周年に当る 1893 年には、世界初の三蔵の製本化を完成し、タイ全国の寺院と諸外国の研究教育機関に寄贈した⁴⁶。外国には、諸外国に滞在する公使が提案した著名な研究教育機関と図書館のリストに基づいて寄贈した。タイ政府の寄贈数は、英国及び保護国（英国 15 部、保護国 16 部合計 31 部）、フランス（20 部）、ドイツ（25 部）、ポルトガル及び保護国（ポルトガル 7 部、保護国 2 部合計 9 部）、オランダ及び保護国（オランダ 6 部、保護国 1 部合計 7 部）、ベルギー（7 部）、イタリア（20 部）、スウェーデンとノルウェー（6 部）、米国（51 部）、デンマーク（3 部）、スペイン（4 部）、日本（教育機関 6 部、仏教組織 24 部合計 30 部）、ロシア（20）の合計 223 部に上った⁴⁷。さらに 1897 年ヨーロッパ諸国訪問時にも、国王は 5 部を用意させた⁴⁸。その後に著名な機関に贈られたものをあわせると、約 30 国に 260 部が贈られた。タイ文字版パーリ語三蔵を出版して、植民地化された仏教国および世界の有名な教育機関へ寄贈した理由は次のようなことが考えられる。

第 1 に、チュラーロンコーン王は「パーリ語テキストを使用する仏教信仰国で独立国は、タイ一国のみである。仏教信仰者が存在するが、仏教の擁護者（国王）がいない国々に対して、真の仏教の教えを広めるべきである⁴⁹」と述べている。スリランカ、ビルマ、ラオス、カンボジアの仏教を信仰している周辺諸国がヨーロッパ勢力の植民地支配下に置かれたために、国王は、仏教の本来の姿が変り、最悪の場合には駆逐されるという危惧を抱き、仏教を守る役割は唯一の仏教独立国、タイにあるという使命感を感じたことである。

第 2 に、欧米列強をはじめとした国際社会の、好意的な反響を期待し、世界にタイ国の存在を示そうとしたことである。在米タイ総領事アイサック・タウンセンド・スミス（Issac Townsend Smith）が、外務大臣テーワウォン親王宛の手紙で、「即位式 25 周年祝賀式典の記念品である、この美しい聖書はシャムにおける優れた印刷技術を示すことになる。また、アメリカの教育研究機関に贈られることは国王陛下の国とアメリカの関係が緊密になり、アメリカ人にシャム国またはシャム国民への好意をより一層抱かせるようになる。今後、シャムは地球儀のどこにあるのかと尋ねるような人は恥ずかしく思うようになるだろう⁵⁰」と述べたように、三蔵寄贈はタイ国のアドバータイズに意義があった。三蔵寄贈後、平和を求めるタイの存在をさらに印象づけるために、チュラーロンコーン王はヨーロッパ外遊に出発した。

第 3 に、西欧列強は、植民地主義を非文明国の文明化によって正当化したが、タイは、野蛮国というイメージを覆し、西欧諸国と同等の文明・文化を有し、進んだ国民教育があり、優れた近代的な印刷技術が備わっていることを世界に示そうとしたことが考えられる。このタイ文字版パーリ語三蔵は従来のような筆写ではなく、ヨーロッパ伝来の印刷機を使って印刷したものである。その印刷技術と製本技術は、西洋に認められるほどきわめて優れていた。ハーバード大学図書館がタイ王室からの贈り物を受けた時の感想は、“The thirty- nine volume constitute the

46 *ibid.*, pp. 193

47 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. So.19/1

48 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. So.19/13

49 Chulalongkorn, King of Siam, Wachirayan Warorot, Somdet phra maha samanachao kromphraya, *op.cit.*, 1929, pp. 46-47

50 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. Ko.To.82.2/14

Tripitaka or Sacred Books of Southern Buddhists, they are printed in course type of Siamese characters and although all the Oriental linguists of the college have examined them, no one has been found who can read the word of the works. The typographical works is very good, although the paper is of a very dark and smoky color”.⁵¹」という讃賞であった。

また、英国・アイルランド王立アジア協会 (The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland) の会長のレイ卿 (Lord Reay) は、“Mr.Barrett has told us that the Siamese are indolent and that undoubtedly, I supposed, applies to the traders and the agriculturists. But there are certain exceptions, and I can show anyone here present on the shelves of library of the Royal Asiatic Society a shelf containing volumes all written by one of the King’s bothers, of a very interesting philological character, and also very interesting as regards Buddhism. I suppose Mr. Barrett will agree with me that in Siam the development of Buddhism is matter which is fully worthy of the attention of those who study what is called comparative religion. Therefore we have in the higher classes of Siam certain instance of man who, though priests, devote themselves to the religious question, yet use their seclusion for the purpose of enriching literature and enabling us to get a further insight into a most important branch of knowledge”.⁵²」と述べた。タイの仏教研究・教育は西洋の東洋学者の間で高く評価され、野蛮な未開国ではなく、教育が発展している文明国という印象を世界に与えることができた。

第4に、平和を求め、諸外国との親善関係構築を希望しているというメッセージを発信しようとしたことである。特にタイ文字版三蔵の寄贈は、タイ・日間の正式な文化交流の第一歩となり、友好条約が締結された後、進展がなかった両国の関係を促進させた。日本に贈られた部数をみると、米国 51 部と英国 31 部に次いで、30 部と多く、第3位である。日本へ寄贈された三蔵部数が、比較的多かったことは、日本は仏教信仰国であり、タイの友好条約締結相手国であったからである。また、タイ側の日本への関心が高く、日本はヨーロッパと同様に重要な扱いを受けたことを示している。

三蔵の寄贈を受けた後、各国から礼状が返されてきた。そのなかに、天台宗比叡山延暦寺から外務大臣テワウォン親王に宛てた、国王の貴重な贈り物を拝見して、大変気に入る、パーリ語と梵語学習に熱意が生じた⁵³、という書簡がある。日本への寄贈の意義は、①日本は大乗仏教（北方仏教）であり、北方仏教と南方上座仏教の交流に寄与できること、②日本と親交関係を促進することができ、文化交流の基盤とすることができること、③近代化に成功してヨーロッパ諸国と肩を並べた日本から、タイは仏教隆盛な文明国として注目を集めることができること、④日本仏教界に三蔵学習を刺激して、変容した日本の仏教を仏教の教えの原点に戻らせるにきっかけとなること、などが挙げられる。

51 *The Bangkok Times*, May 23rd, 1895, pp.2

52 *The Bangkok Times*, August 2nd, 1899, pp.2

53 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. So.19/13

3. 仏舎利奉迎及び分与

チュラーロンコーン王がヨーロッパ諸国外遊で唯一独立した仏教国家の国王かつ仏教の擁護者であることを世界に知らせた1年後、1898年にイギリス政府から、インドで発掘された仏舎利を、世界唯一の仏教を擁護する国王に寄贈するという申し出があった⁵⁴。1898年1月20日にイギリスの人考古学者ウィリアム・ペッペがネパール国境近くインド北部バスター郡（Basti District）ピプラーハワ村（Pipurahawa Kot）の自分の所有地内にある塔を発掘して、アショーカ王時代以前の古代文字で「仏陀の遺骨を蔵するこの龕は名声高き釈迦族の兄弟と姉妹、ならびに息子と妻が奉祀したものである」と刻まれた壺を発見した。その壺の中に納められた人骨は、仏陀の火葬時に釈迦族に分配された仏舎利であることが判明した⁵⁵。釈迦の実在について議論があった時代に、仏舎利の発見で釈迦の実在が立証され、学会にも、仏教界にも衝撃を与えた。1898年2月27日付けの「パイオニア」紙に釈迦の御真骨の発見として報じられ、世界中の仏教徒にとって最高に喜ばしいニュースとなった。

仏舎利発見を耳にしたシナウォーラウォン僧（プリッサダーン親王）⁵⁶は、1898年4月9日付けでペッペ宛に手紙を送り、世界で唯一仏教の擁護者であるタイ国王に仏舎利の分与を任せるために、仏舎利譲渡を希望した⁵⁷。しかし、インドを治めていたイギリス政府は、あらゆる仏教信仰国と関係を持っているので、仏教に対する敬意とイギリス政府の善意を表すチャンスであり、さらにタイとの関係を深化させる機会ともなると考え、特定の個人に譲渡するよりも、直接チュラーロンコーン王に寄贈することを決めた。この仏舎利寄贈の条件は、受領した同王がセイロンとビルマの仏教徒にも分与することであった⁵⁸。

チュラーロンコーン王は専門家の調査によって釈迦の御真骨であることが判明した後⁵⁹、英語に堪能なナコーンシータマラート州総督かつ教法試験合格者であったプレイヤー・スクムウィナイウィニット（後のチャオプレイヤー・ヨマラート、以下スクムウィナイと略す）を仏舎利の奉迎正使に任命した。スクムウィナイは1899年2月16日にインドへ出発して仏舎利を受領した後、帰路タイ南部のトラン、パッタラン、ソンクラールを経由して帰京した。地方での仏舎利拝迎式には

54 タイ国立公文書館（N.A.T.），R5. Ko.To.82.1/3

55 タイ国立公文書館（N.A.T.），R5. So.11.12/11

56 プリッサダーン親王（1851–1934）はラーマ3世王の孫に当たり、ヨーロッパ約12国にタイ公使を務めた。優秀であったため、チュラーロンコーン王に大変気に入られた。しかし、国王が西欧列強に対する今後の対応について個人的な意見を尋ねたとき、プリッサダーン親王をはじめ、王族官僚合計11名が署名した「ラッタナコーシン暦103年国家体制の変革に関する王族および官僚による建白書」を国王に上奏したため、国王の不興を買った。その後、スリランカで仏門に入り、シナウォーラウォン僧と名のつた。（詳しくは Pritsdang, Praongchao, *Prawat yo nai pan ek piset phra worawongther phraongchao pritsdang tang tea phrasut po.so.2392 thung 2472 lem 1* (Prince Pritsdang Chumsai Autobiography B. E. 2392-2472 Vol.1), Phranakorn, 1929, M.L.Manich Jumsai, *Prince Prisdang's Files on His Diplomatic Activities in Europe, 1880-1886*, Chalermnit, 1977)

57 タイ国立公文書館（N.A.T.），R5. So.11.12/11

58 同上

59 従来、タイでは仏舎利は土中から発掘されるものではなく、空から降ってくるものだと思われていた。また、伝統的に仏舎利とされたものは、きれいな玉状の形をしていたが、インドで発掘されたものは人骨の状態であった。そのため、チュラーロンコーン国王は本当の釈迦の遺骨であるかどうか悩んだ。鵜呑みにして偽物の仏舎利を受領した場合、国内のみならず世界から嘲笑され名誉を汚される。しかし、拝領しない場合は世界から仏教擁護者としての役割を果たしていないという批判を受けることになる。国王はワチラヤーン親王やダムロン親王にパーリ語碑文を解読させた。その結果、釈迦の真骨であることが判明した。（Chulalongkorn, King of Siam, Wachirayan Warorot, Somdet phra maha samanachao kromphraya, *op.cit.*, 1929, pp. 66)

数万人が参拝した。⁶⁰スクムウィナイはその際、「仏舎利の奉迎は国王のためではなく、国民が参拝するためである。現世のみならず来世のためにも国民に貢献している国王の御恩に感謝せよ⁶¹」と地方民衆に説いた。

仏舎利の奉迎はタイとイギリス間の友好関係促進のほか、チュラーロンコーン王はタイ国民に対して、国際的に認められた正法王の印象を与え、国王を中心とした絶対王制国家形成にも貢献した。仏舎利は、1899年5月23日にバンコクのワット・サケート寺境内にあるプーカオトーン（黄金の大仏塔）に安置された。

国王は、セイロンのアヌラーダプラ、キャンディ、コロンボ、ならびにビルマの北部と南部へ仏舎利を分与し、イギリスとの約束を果たした。1900年1月9日にワット・プラチェトゥボン寺においてセイロンとビルマへの仏舎利寄贈式が行われた。その後、ロシア、日本、シンガポール、マグイなど各国から仏舎利分与の依頼があり、同王は、シンガポールとマグイはタイに近くタイへの仏舎利参拝が容易なので、残り少ない仏舎利は、ロシアと日本に分与することに決定した⁶²。

当時ロシア留学から一時帰国した王子ピサヌローク親王が、オクトムスキー親王（Prince Oktomsty）のロシアの仏教徒へ仏舎利を分与して欲しいという伝言を伝えたところ、国王は迷わずロシアに分け与えることを決めた。ピサヌローク親王は1900年に留学先のロシアに帰る際に、小仏塔に納められた仏舎利をロシア仏教徒代表約60人に寄贈した⁶³。タイとロシアとの関係は、1891年にニコライ2世が皇太子であったときに訪タイしたことから始まった。1897年のチュラーロンコーン王の訪欧では、最初にロシア訪問先を選び、さらに、ニコライ2世に息子のピサヌローク親王の教育を頼むまで友好な関係を結んだ。フランスの同盟国ロシアへの仏舎利寄贈は、ロシアの力を借りてフランスの対タイ圧迫を緩和させる期待があった。

一方、セイロンとビルマに仏舎利が贈られたことを耳にした稲垣満次郎公使は、日本にも仏舎利を分与してほしい旨を申し入れた。日本には多数の仏教宗派が存在しかつ、政府の統制下に置かれていないことを知る国王は、仏舎利を日本の特定の宗派ではなく国家から国家に贈るという形で寄贈することにした⁶⁴。1900年6月16日に日本の奉迎代表団を前に仏舎利寄贈法要が行われた。日本への仏舎利分与は、1898年の修好通商航海条約締結後の両国関係発展に貢献し、タイと日本の友好関係のランドマークとして位置付けられるべき大イベントであるので、第V節で詳述する。

IV. 対日の関係と仏教交流

1. タイ独立危機と国交開始後日本の存在

ヨーロッパ諸列強が東南アジアに本格的に進出してタイに影響を及ぼすようになったのはラーマ3世王（1824—1851年）の時代である。列強による周辺国の植民地化が進んでいくなかで、タイも植民地主義の脅威にさらされた。1855年にイギリスとの間にバウリング条約が締結され、

60 タイ国立公文書館（N.A.T.）, R5. Ko.To.82.1/2

61 同上

62 タイ国立公文書館（N.A.T.）, R5. Ko.To.82.1/7

63 Sathian Lailak et al. ed., *op.cit.*, vol.17, pp.278-280

64 タイ国立公文書館（N.A.T.）, R5. Ko.To.82.1/7

自由貿易が本格的に始まり、いわゆる開国の時代が始まった。この条約を契機にして、タイはフランス、米国など次々と不平等条約締結を余儀なくされた。チュラーロンコーン王（ラーマ5世王）時代に入ると、西欧列強の圧力はますます高まった。

タイが植民化の危機を強く実感したのは、1885年に英軍がマンダレーを占領し、ついにビルマを植民地としたときであった。チュラーロンコーン王は、ヨーロッパの状況によく知っている駐欧公使プリッサダーン親王に西欧列強に対する対応方法に関し意見を求めた。プリッサダーン親王と王族官僚合計11名は「ラッタナコーシン暦103年国家体制の変革に関する王族および官僚による建白書」⁶⁵を奏上した。西欧列強の植民地化から独立を維持するには、柔軟な外交手段、軍事的手段、英仏国の緩衝国、あるいは条約締結などの方途だけでは不十分であり、絶対君主制から立憲君主制への転換、王位継承法の明確化、不正撲滅、言論の自由、平等な税徴収制度、国民平等を保証する法改正など、内部改革が必要であり、さらにヨーロッパの諸制度を導入して近代国家建設をした日本のように進むなら、ヨーロッパ諸国はタイを認めて対等に扱うであろうという内容であった。

1887年にタイ外務大臣テークウォン親王がロンドンでのビクトリア女王即位50周年祝賀式典に参列し、欧米諸国を視察後、日本を訪問した。同年9月26日に「日暹修好通商に関する宣言」が調印され、両国の国交が正式に開始された。タイと日本は西欧列強の植民主義に脅かされ、不平等条問題を抱えているもの同士であったため、条約締結に容易に合意することができたと考えられる。日本は、欧米列強と同様にアジア諸国と条約を締結し、自分の存在を示そうとしており、一方、タイはできるだけ多くの外国と友好条約を結んでその力を借りる狙いがあったからである。しかし、1898年の「日暹修好通商航海条約」締結までは、三蔵贈呈を除き、両国間には目立った外交の進展は見られなかった。

外交進展のなかった10年の間には、イギリスとフランスの列強勢力に包囲されたタイに同情し、両国による侵略からタイを救おうとした岩本千綱や石橋禹三郎などのアジア主義者のタイでの活動が見られた。岩本千綱と石橋禹三郎はタイがフランスに侵略された「パークナム事件⁶⁶」と呼ばれる事件のニュースを聞くと、急いでタイに渡った。渡タイした二人は、農商務大臣プラヤー・スラサクモントリー（以下スラサクモントリーと略す）に面会し、スラサクモントリーの提案で「日暹殖民会社」を設立した。同社は、人口過剰な日本から農業移民者をタイに送ることを目的としていた。タイに送られた移民は鉱山業、鉄道建設の工事に従事したが、マラリア、コレラに罹り、ほとんどが死亡してしまった。彼らの移民事業は失敗に終わり、日暹殖民会社を閉鎖した。

パークナム事件後、フランスは条約の合意事項をスムーズに行わせるために、担保としてチャンタブリーを保障占領した。フランスはそれだけで満足せず、不平等条約の治外法権を乱用して、中国人、日本人、タイ人などフランス植民地出身ではない人でもフランス保護民として登録させた。フランスは保護民の数を増加して、タイ国内のフランス勢力を拡大し、さらには保護民によ

65 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. Bo.2/16

66 パークナム事件は、1893年4月にフランスはメコン左岸からタイ軍の撤退を要求したが、タイはこれを拒否したため、フランスの軍艦2隻がチャオブラヤー川の河口（パークナム）から遡上し、バンコクを封鎖し、ラオスの割譲を迫った。その結果、緊張感に迫られたタイはフランスの要求を全面的に受け入れ、賠償金を支払い、メコン川左岸を割譲することとなった。

る不法行為の増加でタイの治安を悪化させようと企図した。

バンコク・タイムズは日本人移民の状況について次のように記した。「フランスの鉱山会社は日本の移民会社を通して、労働移民を輸入した。タイに到着した移民をフランス保護民(Protégé)として登録させ、採掘に従事させた。日本人移民の80パーセントは薬さえ与えられず、すぐに熱とコレラで死んでいった。残りは死を待つばかりの者で、移民会社の救助員が到着する前に、全員が死亡した。1895年にバンコクにいる日本人が日本政府に在タイ領事の設置を要求したことを耳にしたフランスは、日本政府に、在タイ日本人に治外法権を提供することを申し出た。日本人たちはフランスの申し出を認めた日本政府に憤慨して強く抗議をした⁶⁷。」

ちょうどこの時は、日本がタイとの条約締結に動き始めた時期であった。1894年4月に、稲垣満次郎と駐シンガポール領事の斉藤幹が、在タイ日本人の実態を把握し、通商条約締結と領事館設立の可能性を探るためにバンコクに訪れた。1895年に日清戦争が終結すると、「東邦協会⁶⁸」は会頭副島種臣の名で「(一) 東洋列国均勢維持ノ為、(二) 均勢の機関整備スル為」、外交機関の拡張と外交活動の機敏な展開を主張して、1895年11月に、日暹修好通商条約の早期締結を訴える建白書を、総理大臣伊藤博文、外務大臣西園寺公望に送った⁶⁹。

1896年8月に東邦協会は、日暹修好通商条約の各条項に関する細かい意見を発表したが、中心になって活動したのは幹事長の稲垣であった⁷⁰。1897年に在タイ公使館の設置が実現し、稲垣満次郎が初代タイ国駐在弁理公使に任命された。

2. 日本との不平等条約における治外法権と日本人僧侶の布教活動

タイはイギリスとフランス、両国の勢力争いを巧みに利用して植民地化の圧力を回避しようと試みた。パークナム事件の際、タイは、タイに権益を持つイギリスがフランスの侵略を牽制し、タイを支援することを期待した。しかし、イギリスは手を貸さなかった。支援の期待を裏切られたチュラーロンコーン王は、イギリスのみに依存することはできなくなったため、ロシア、日本、ドイツなどの大国を介入させて、イギリスとフランスとの勢力の拡大を抑制する方法を採用した。

日本は1895年に日清戦争で勝利をおさめ、イギリスをはじめ、次々と欧米諸国と不平等条約の改正に成功し、更には1902年に日英同盟を締結した。これによって、日本の国際的地位が高まり、欧米諸国と肩を並べるようになった。タイ王族や官僚の一部には親日派が生じ、日本との関係を深めることに積極的となった。ダムロン親王は、日英同盟が締結されたことは、フランスにタイ侵略を躊躇させる効果があると考えた。さらに、彼は、日本との関係を深めるためにチュラーロンコーン王に訪日を勧めた⁷¹。国王自身は、結局訪日しなかったが、英国留学を終えたワチラーウット皇太子(後ラーマ6世王)が、1902年末にアメリカ経由で日本に立ち寄り、日本各地を視察した。

日本とタイの外交が本格的に始まり、タイにおける日本の政治経済力の拡大が見られるようになったのは、1897年に稲垣満次郎(1903年に特命全権公使に昇格)が初代タイ国駐在弁理公使

67 *The Bangkok Times*, December 5th, 1895, pp.3

68 東邦協会は1891年4月に副島種臣によってアジアの研究を目的として設立された。1893年に稲垣満次郎が幹事長に選ばれた。

69 石井米雄、吉川利治『日・タイ交流600年史』講談社、1987年、pp.130

70 同上

71 タイ国立公文書館(N.A.T.), R5. To.6/9

に任命され、タイに渡ったときからである。タイは近代国家建設を促進するために、専門知識をもつ人材の必要性が生じ、各分野に顧問・専門技術者を各国から積極的に採用した。タイはいずれかの一国の影響力を拡大させないために、お雇い外国人の国籍を多様化した。稲垣がタイに駐在している間、お雇い外国人をタイ政府内に派遣し、日本の勢力を拡大することに大いに貢献をした。日本のお雇い外国人は法律顧問の政尾藤吉⁷²、タイの農務省の蚕業技師の外山亀太郎、教育家の安井てつ、などを挙げることができる⁷³。また、稲垣はタイの王族・官僚から信頼を得るために、仏教の式典にも積極的に参加した。日本の動きを近くで観察していたロシアは、日本の影響力拡大のためタイ側に働きかけている稲垣の活動を次のように述べている。「稲垣夫妻は国の代表としてではなく、同じ仏教者として王宮内に行われる仏教の式典や王族の儀式に出席したために、タイ人に好まれている。特に国王は稲垣を気に入っているようだ⁷⁴」。

稲垣がタイに渡って9ヶ月後、1898年2月25日にテークウォン親王と稲垣が「日本暹羅修好通商条約航海条約」に調印した。条約締結の交渉が難航したのは、日本がタイ国における領事裁判権、いわゆる治外法権を獲得しようとしたのに対して、交渉に当たったタイ総務顧問ロラン・ジャックマン（Gustave Rolin Jaequemyns, 1835—1902、ベルギー人、タイ爵位：チャオブラーヤー・アパイラーチャー）が領事裁判権を日本に与えまいとしたからであった。結局、タイが法整備を完成施行後1年間までの間は、日本は領事裁判権を持つこと、その点は本条約とは別の議定書に明記することとなった。タイは日本と締結した条約が不平等であると分かりながらも、均衡政策の必要上、日本に譲歩したと考えられる。

諸外国との不平等条約にともなう治外法権問題は、タイ政府が抱えている最大的外交課題となっていた。1907年、当時のタイ国内に居住する外国人及び外国領事館の保護下にある保護民の数は総計24,665名であった。このうち欧米人はわずか1,600名で、残りの大多数は中国や近隣諸国から流入したアジア系移民であった。なかでも、フランス人とフランス保護民は16,455名を占め、イギリス人とその保護民5,690名をはるかに超えていた⁷⁵。

1898年から99年の間、稲垣公使が一時帰国した際に、在タイ日本公使館は、台湾出身の中国人を日本の保護民として登録した⁷⁶。ダムロン親王が稲垣に尋ねたところ、稲垣は自分の不在中に、代理公使が独断で行ったもので、今後保護民登録に注意を払うと約束した⁷⁷。

稲垣公使はタイ政府の要請に協力したが、民間人による治外法権の乱用が相次いで発生した。その一つは、日本人僧侶が多数の中国人を保護民として登録した事件である。1907年に、ラー

72 政尾藤吉（1870—1921）は愛媛県大洲市に生まれた。1889年に東京専門学校（現在の早稲田大学）英文科を卒業後、アメリカに留学し、1895年ウェスト・バージニア大学法学部を卒業した。さらに1897年にエール大学の博士号を獲得した。帰国後、同年に日本外務省からタイ政府の法律顧問として選ばれ、渡タイした。タイの古代インド刑法、日本の刑法、イタリアの刑法を参考に政尾が起草した刑法は、1908年に公布された。その後、民商法の起草に着手したが、政尾は多妻制を法律上認めることに激しく反論し、決着が付かないまま、1913年に日本に帰国した。1920年、特命全権公使としてタイに赴任したが、翌年8月脳溢血で急逝した。16年間も在タイした政尾はタイ近代法の整備、司法制度改革に多大な貢献をし、国王よりプラヤー・マヒトーンヌーパコンコーソクンという爵位を授けられた。

73 タイに招かれた日本人専門家は数々の功績を残した。政尾藤吉はタイ法典整備、農業博士外山亀太郎は養蚕学校を設立し、養蚕の指導、タイシルクの改良に尽力した。安井てつは、ラーチニー女学校の設立など、タイの教育分野に貢献した。

74 Duke, Pensri, *Foreign Affairs and Independence and the Thai Sovereignty (Since the Reign of King Rama IV to the End of Field Marshal P. Pibulsonggram Regime)*, Chao Phraya Press, 1984, pp.111

75 前掲、石井米雄、吉川利治、pp. 136-137

76 *The Bangkok Times*, September 28th, 1899, pp.2

77 タイ国立公文書館（N.A.T.）, R5. To.22/22

チャブリー地域で大乘仏教伝道活動後日本に帰国した僧侶の後任となった宮沢という人物は、保護民登録料 170 バーツを支払えば、徴兵の義務の免除、犯罪を起しても投獄を免れる特権が与えられると吹聴して、信者の弟子たちから現金を騙し取った⁷⁸。また、ナコーンチャイシーとバンコクでも同じような事件が発生した。日本人僧侶 3 人が、バンコクで布教活動を行い、一人 200 バーツの加入料を徴収した事件である。中国人の信者は、400～500 人にも上った。日本人の大乘仏教布教僧侶たちは、アメリカのキリスト教伝道師の衣装を纏い、御経も教法も何ら唱えず、家を借りて旗を掲げるだけであった⁷⁹。日本人僧侶を歓迎して、南方仏教と大乘仏教の交流によって仏教を盛んにしたいという国王の期待とは裏腹に、大乘仏教布教を騙って金を騙し取る日本人が出てきたのである。ダムロン内務大臣は日本公使に保護民登録証明書廃止を求め、また、日本保護民登録証明書を所持している中国人が事件を起こした場合、タイ人として取り扱った⁸⁰。

来タイ日本人が治外法権を利用して罪を犯す事件は生じたが、日本公使館の積極的な対応はタイ政府を満足させ、深刻な問題には発展しなかった。タイの治外法権問題は、ワチラーワット王時代まで続いた。1920 年に調印した暹米条約と同じ内容で、1924 年 3 月 10 日に日本国暹羅国間修好通商航海条約が締結されたことによって、不平等条約と治外法権は消滅した。

V. 仏舎利奉安からみるタイと日本の関係

1. 日本への仏舎利分与

日本暹羅修好通商条約航海条約の交渉に成功した稲垣は日本に一時帰国するとなった。日本政府はタイとの条約内容に不満を持ち、稲垣に帰国を命じた⁸¹という報道が広まった。稲垣がタイに公使として任命されたのは、松方正義総理と大隈重信外相の時代（1896 年 9 月～1898 年 1 月）であったが、条約交渉が決着したのは 1898 年 2 月であり、第三次伊藤博文内閣（1898 年 1 月～同年 6 月）に変わっていた。伊藤博文内閣は親欧米派であり、欧米諸国の反感を招かないように、南洋との積極的な関与を警戒していた。第二次伊藤博文内閣時代（1892 年 8 月～1896 年 9 月）には、タイにおける日本の動きにジェラシーを感じていたフランスの気持ちを傷つけないように、タイにいる日本国民に帰国するように日本政府が呼びかけた⁸²例さえある。稲垣は帰国して伊藤首相に日タイ通商条約の効能を説明しようとしたが、逆に日本がタイに接近することはフランスの反感を買う恐れがあると反論された。

タイに再び戻ることができた稲垣はタイと親交を構築することが正しいことを証明するために、タイとの友好な関係促進の更なる展開を図った。日本政府がタイ公使を廃止して、タイ・日親交に傷がつくことを恐れた稲垣は、仏舎利奉迎で民間の世論を喚起して政府にタイ日親善の必要性を訴えようと計画した⁸³。タイが他国に仏舎利を分与したと知った稲垣は、テーワウォン親王とパーサコーラウォン文部大臣に面会して日本にも仏舎利分与を求めた。国王は「分与可能なので、正式に依頼するように⁸⁴」と回答した。稲垣は、日本は古来からの仏教国であり現在の信仰者数

78 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. To.22/43

79 同上

80 同上

81 *The Bangkok Times*, May 21st, 1898, pp.2

82 *The Bangkok Times*, July 13th, 1896, pp.2

83 佐藤照雄「明治後期の対タイ文化事業—稲垣満次郎と仏骨奉迎事業を中心として—」、アジア太平洋研究科論集 19、2010

84 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R5. Ko.To.82.1/9

は約2千万人、僧侶は5万人、13宗派が存在しており、日本への仏舎利分与は両国の国民を一層緊密にし、同一種族同一宗教の同情を高め、両国の関係を深める絶好の機会であるという旨の公文を、1900年1月27日付けで外務大臣テークウォン親王宛に提出し、正式に仏舎利分与を要請した⁸⁵。

タイ政府は1900年2月1日付け公文において、特定の仏教宗派ではなく国家から国家に対する贈り物という形式で寄贈するので、日本から奉迎代表団を派遣してほしいと回答した⁸⁶。タイ政府が日本に分与する理由は、まず、日本には仏教が古くから定着し、信仰者が多いからである。次に、「皇室は神道の信仰者であるが、庶民は大乗仏教を信仰している。日本への分与は、仏教徒に信仰の意識を高めることができる。また、タイの仏門に入り、南方上座部仏教の修行をしている日本の大乗仏教徒からも感嘆される⁸⁷」とパーサコーラウォンが言うように、仏舎利分与は、日本の仏教徒間に、仏教擁護者であるタイ国王の印象を良好なものにし、仏教をタイと日本の友好関係維持の基盤とすることができることである。

稲垣から国王の仏舎利分与の意向が伝えられると、日本仏教各宗派管長は1900年4月18日より三日間、京都の妙心寺において、各宗派会議を開き、仏舎利奉迎の件について協議をした。その結果、仏舎利奉迎使として大谷光演（真宗大谷派）、日置黙仙（曹洞宗）、藤島了穩（浄土真宗本願寺派）、前田誠節（臨済宗）の4名、随行者14名が選ばれた。同年5月22日にタイへ出発した⁸⁸。

仏舎利奉迎が決まった当初から、マスコミは大騒ぎした。新聞には仏舎利奉迎の反対記事が何度も掲載された。「読売新聞」の社説には、“It is very good to receive the Buddha's ashes if it shall be done in a proper way...Burma had received a born of Buddha's ashes from Siam in a most courteous manner expending a great sum of money (500,000 yen). Comparing the declining country with Japan which is a rapidly progressing empire, Some Siamese newspapers expected much more courtesy and expenditure from our country. On the contrary, all the expenditure to be paid by the empire in order to receive the holy ashes amounts only 80,000 yen out of which 3,000 yen are for presents to H.I.M the Siam King and some Buddhists in his empire...” (The Editorial- Buddha's ashes, Yomiuri May 19th, 1900)⁸⁹」と仏舎利受領のためのタイ行きに、高額な費用をかけることは不適切であると批判した。

駐日タイ公使リッティロンは仏舎利受領に至る背景を次のように述べている。「仏舎利奉迎で大騒ぎが生じ、新聞には他宗教者による仏教徒への批判が掲載された。しかし仏教徒を支援している者には、大隈伯爵（元外務大臣）や（東）本願寺住職大谷光瑩がおり、政府が仏舎利奉迎に反対することはできなかった⁹⁰」。また、政治家などの有力者の支援があったことから、日本の仏

85 同上

86 同上

87 タイ国立公文書館(N.A.T.), R5. Ko.To.82.1/9

88 小室重弘編『釈尊御遺形伝来史』細川芳之助、1903、pp.53-54

89 タイ国立公文書館(N.A.T.), R5. Ko.To.82.1/9

90 同上

舍利奉安には政治的目的があるという指摘や本願寺の募金活動に利用されているという見方もあった。

リッティロンは本願寺について次のように述べている。「京都の本願寺には宮殿のような古代建物があり、封建制のような小作米の徴収や募金活動によって大きな収入を得ている。住職は、領主のように贅沢に暮らしている。世襲で有力な一族であるため、資産家や国会議員を含む多くの人から尊敬されている。もし、政府が反対すると大変なことになるのであろう。仏舎利奉安の際、大勢の人が拝観に行くので、多額の賽銭を得られるであろう⁹¹」。さらに「大谷光瑩が仏舎利拝受を日本政府に働きかけた人であり、タイに仏舎利奉迎に行くための募金活動で数十万円を集めた⁹²」と述べている。

チュラーロンコーン王は「僧侶が混乱を起させるほどの勢力をもっていることから、仏舎利の拝受は帰依よりも富を望み、勢力の基盤づくりのためのであろう。たとえ、ポリティックスとは関係はあっても、宗教的な価値には変わりはない⁹³」と述べ、日本の仏舎利奉安には政治的目的があることを理解しながらも、日本の仏教振興に寄与できるという見解を示した。

1900年6月11日に仏舎利奉迎使の一行がタイに到着し、国賓として鄭重な待遇を受けた。14日には王宮にて奉迎使一行はチュラーロンコーン王に謁見した。国王は日本仏教徒が海外の仏教徒を十分に理解し、交際を親密し、日本仏教が益々隆盛に赴くことを切望するという旨を述べた。翌15日、ワット・プラチェトウボン寺において正使大谷光演師が国王勅使パーサコーラウォン文部大臣により仏舎利を授受した。その後18日、国王は奉迎使一行を王宮における陪食に招き、日本仏教徒には金銅仏像一体、三蔵の写本（王妃より）、大谷光演には小仏像を寄贈した⁹⁴。国王は、仏舎利を奉安する覚王殿建設のために材木を寄贈することを約束した。奉迎使一行は19日に日本へ出発した。

リッティロンは、日本における盛大な仏舎利奉迎の様子を次のように報告した。「7月11日に長崎上陸、翌12日より信徒参拝のため皓台寺に、14日より神戸に安置された。19日に大阪四天王寺にて奉迎式が行われ、行列は約5千人、参拝するものは数万人に及んだ。21日、一行は京都の(東)本願寺の大師堂に仏舎利を安置した。大勢の仏教徒の線香で、煙で覆われている状況であった。翌日22日に、覚王山の位置が確定されるまでの仮奉安所である京都妙法院に移動した。本願寺は、西と東に別れているが、仏舎利奉迎では協力した。もし東本願寺に安置されると非難が生じる恐れがあったため、中立の妙法院に仮奉安することになったのである。妙法院までの奉迎行列には、各宗派の管長やタイ公使をはじめ、数万人が参列して、道の両側には大群衆が集まり、大混雑した⁹⁵」、と。

仏舎利奉迎式は仏舎利の通過を見ようと集まった人々が数十万人にも達した大イベントであった。仮奉安所までの仏舎利奉迎は無事に終了したが、恒久の仏舎利奉安所である覚王山建設地の確定にいたるまでには、約3年間も費やした。

91 同上

92 同上

93 同上

94 同上

95 同上

2. 仏舎利奉安所選定をめぐる騒動

稲垣公使より日本に仏舎利を贈与するという知らせを受けた日本仏教諸宗派は、1900年4月の各宗派会議で仏舎利奉迎、覚王山の建設および護持のために帝国仏教会を設立することを決議した。同会は同年6月に日本大菩提会と改名された⁹⁶。大菩提会の目的は、第一期事業として覚王殿建設、第二期事業として教育および慈善事業であった。覚王殿およびその付属建物の建築坪数は5800余坪、敷地は10万余坪、その経費は約1千万円を要する巨大プロジェクトであった⁹⁷。

覚王山建設地の選定に関しては、幾度も論議を重ねたが容易に決着するには至らず、仏舎利は妙法院に仮に奉安されたまま、進展のないまま約1年半が過ぎた。1901年11月17日のチュラーロンコーン王即位祭のときに、国王は外山義文領事に日本到着後の仏舎利について尋ねた。外山領事は日本仏教界の実情を暴露するわけにはいかないため、妙法院に仮に奉安しており、大規模の覚王山建設を計画しているが、場所を選定中であると回答した。国王は非常に不機嫌な様子で、地所が未だ決定されていないのかと問い返した。早く寺院建設に木材を寄進したいという国王の要望を受けて困った外山領事は、大菩提会の村田寂順会長と長前田誠節副会宛に1901年11月26日付け書簡を送り、「陛下御遺骨贈与の芳志を空しくせず且つ日本仏教徒の恥辱とならざる様希望の至りに有之候且つ一国の王者に対しての約束は自ら一己人に対しての約束と其軽重の度に於いて相異り候ものに有之傍慎重の御考慮を煩し度候又稲垣公使より特に大菩提会へつたえられ候様との一事は客年各宗より別に国王陛下へ献進すべき約束に相成居る書籍は二三派を除く外今に献進相成居らず斯くの如きは甚だ日本仏教各宗派の信用を傷くるものなるに依り至急に儉約履行相成度...⁹⁸」と、一国の国王との約束は一個人との約束とは重さが異なることを考慮して、日本仏教徒の恥辱にならないように至急に約束を果たすように強く戒めた。

各宗派が仏舎利を独占しようとして、覚王殿建設位置に関する問題は容易に決着には至らなかったため、やむを得ず各宗派から9名の委員を選出して協議し、覚王山を京都に建設する決議をした。そのころ、名古屋市は御遺形奉安地選定期成同盟会を設け、その会員数は約50万人を上回った。同盟会の有志者数100名の連署で、1902年3月に次の請願書を大菩提会宛てに提出した。すなわち、名古屋は東西両京の間にあり、仏教宗派は33派、各宗派寺院の数は35,000ヶ所、仏教徒は2百万人も存在する。さらに、2百万円を越える寄付金と建設用地の献納の申し込みがあるので、仏舎利奉安地を名古屋市付近に定めること希望する⁹⁹、と。また、愛知県知事沖守固と名古屋市長青山朗は、何度も大菩提会に名古屋に覚王山を建設を求める書簡を送った。それにも拘わらず、覚王山建設地は決定されなかった。

1902年12月にワチラーウット皇太子がイギリスからの帰路、日本に立ち寄ることとなり、大菩提会内にはその時までには奉安地を選定しなければならないという緊急事態が生じた。皇太子の訪日が迫るなか、各宗派管長会議が7月28日から京都で開かれた。建設地をめぐる、京都派と名古屋派が激しく対立していた。「会議は全く名古屋京都派の決戦場の如き有様となれり、両地の新聞紙の如きは、各筆鋒を磨して、又處々に演説を公開して、之を民衆に訴えるなど競争漸

96 前掲、小室重弘、1903、pp. 83

97 同上、pp.90-93

98 同上、pp.94-96

99 同上、pp.98-101

次激烈となり、言うに忍びず筆するに堪へざるの、怪事醜聞も、往々にして新聞上に花を咲かせ、有心者をして窃に顰蹙せしむる程の、極端なる論争に至りたる¹⁰⁰」という仏教界らしからぬ異常事態となったのである。

同年 11 月 12 日に建仁寺で開かれた各宗派会議で、午前の会議では名古屋派の優勢で終了した。京都派は、記名投票で決定すべしと名古屋派に交渉したところ、名古屋派は、記名投票は怨恨を残す恐れがあるため、無記名投票にすべきであると京都派の提案を断った。京都派の臨済宗各宗派及び黄檗宗は欠席届を議長に提出した。その後、委員が次々と退席し、午後の会議をボイコットした。残り 38 名による無記名投票採決が行われ、長年続いた覚王山建設地問題は 37 対 1 で名古屋の勝利に決定した。妙法院に仮奉安していた仏舎利は、この決定に基づき、11 月 15 日に名古屋市に奉遷することとなり、名古屋市の奉安所を名古屋市門前町の万松寺に選定した¹⁰¹。1904 年 11 月 15 日に仏舎利奉安所の覚王山日暹寺（後に日泰寺）¹⁰²が誕生した。日暹寺建設には国王からはチーク 2 本が贈られ、日本側は大隈伯爵、後藤新平男爵、佐久間左馬太伯爵からも木材が寄贈された¹⁰³。

日本仏教界が弱体化しているなか、タイから日本仏教徒のために寄贈された仏舎利の奉安は、仏教徒の信仰を取り戻す絶好のチャンスになるはずであったが、大菩提会内部の各宗派の利害は一致せず、仏舎利奉迎後の奉安所建設地選定をめぐる各宗派の激しい対立は、日本仏教界の信用を傷つけ、世間の顰蹙を買うこととなった。大菩提会の豪華な仏舎利奉迎旅行やその募財のあり方も批判を受けた。タイ側は、日本の仏舎利受領は仏教的敬虔からよりも政治目的と募財の利益のためであると理解した。

しかし、仏舎利奉安は①日本全国からの注目を集めることができて、タイ国の存在と友好心を日本に示すことができたこと、②稲垣の思いどおり、タイ日間の親交の必要性を日本政府と国民に認識させることができたこと、③タイと日本の仏教・文化交流の基盤となったこと、④仏教の布教と、タイと日本の仏教徒の団結に寄与したこと、といった両国の緊密関係構築に貢献したイベントであったことは間違いない。日泰寺はタイと日本の友好の象徴となった。同寺にはタイ王族が何度も訪れた。1931 年にプラチャーティポック王とラムパイパンニー王妃、1963 年にはプミポン国王とシリキット王妃が参詣した。日タイ修好 100 周年に当たる 1987 年には同寺におけるチュラーロンコーン王の銅像の除幕式に、ワチラロンコーン皇太子が参詣した。

VI. おわりに

仏教は、文化、習慣、価値観などタイ社会のあらゆる面において深く根をおろし、タイ人の日常生活に深く影響を及ぼしている。仏教はタイ社会の秩序、支配の正統性、国民統合など社会的政治的に重要な役割を担っている。特に、タイの近代化時代においては、仏教は、近代国家の形成、民族意識の創出の重要な力となり、さらに、諸外国との友好関係を深め、国際社会における

100 同上、pp.116-117

101 同上、pp.116-132

102 1939 年にシャム国がタイ国と改名されたので、1941 年に日泰寺と改称された。日泰寺は他の寺院と異なり、いずれの宗派にも属していない日本で唯一の超宗派寺院であり、寺院建立当時の条件に従って、創建当時の関係仏教各宗教 19 宗派の僧侶で共同管理し、管長は輪番住職交替制により 3 年交代で運営されている。

103 タイ国立公文書館 (N.A.T.), R6.To.25/10

タイの存在を高める上でも、大きな貢献をした。

周辺諸国がフランスとイギリスの植民地に陥るなかで、チュラーロンコーン王は旧勢力から政治の実権を取り戻した後、西洋文明を積極的を受け入れると同時に、国王への権力集中を通じて中央集権的近代国家を樹立するために、国政改革を行った。西欧列強の植民地主義の脅威に対抗するには、国家の近代化、国の統一、国民国家建設が必要であった。タイは近代的な西欧諸制度の導入、統治改革による絶対王制の確立、近代化の担い手である人材育成のための教育改革などの方策を採った。この一連の改革において、多大な貢献をなしたのはタイ人の生活に深く浸透している仏教思想と仏教サンガである。統一国家の構築のために、中央で訓練された僧侶を全国各地に送り込んで、教育を担当させると同時に、中央政府が求める思想を民衆に浸透させ、同じ共同体にいるタイ人という意識を植え付けた。

また、チュラーロンコーン王時代における仏教振興活動、とりわけ仏教に関する書籍の出版と配布、仏教施設の建築・改築、サンガへの寄進など仏教とサンガ組織を擁護することで、国王支配の正統性を確立し国王による統治体制をさらに強化した。

タイは西欧列強の植民地支配を回避し独立を維持するためには、諸国と不平等条約を締結して、同一の権利権益を与えて、バランス・オブ・パワーの外交手段を採りながら、積極的にロシア、ヨーロッパ諸国、日本など、様々な外国と親交を結んで、イギリス、フランスからの圧迫を緩和しようとした。

独立維持に外交手段と軍事力だけでは不十分であると痛感したタイは「善行の力」政策、つまり受容すべき西洋文明を選択的に導入しながら、同時に、自国の文化的伝統と宗教を強化して、これを武器として西欧勢力に対抗しようとした。タイは、仏教を積極的に利用して列強との友好関係を深めながら、タイ近代国家の文明性を国際社会に示すことを試みた。この「善行の力」政策で、他の東南アジア諸国が次々と植民地化される中で、タイは独立維持に努めたのである。西洋の仏教研究者への支援と、世界中の教育機関への仏典の寄贈は仏教の普及促進と学術研究の発展に貢献したのみならず、仏教協力の世界的ネットワークづくりでもあった。

特に、同じ仏教国であり、独立国である日本と友好関係の促進には、仏教は重要な役割を果たした。日本へのタイ文字版パーリ語三蔵寄贈は、日本仏教界に南方上座仏教への関心を生じせて、北方仏教と南方上座仏教の交流の促進に寄与した。また、タイは、日本との親交関係のさらなる進展を希望するというメッセージを伝達することができた。

インドで発掘された仏舍利をセイロン、ビルマ、ロシア、そして日本の仏教徒に分与したことは、相手国との友好関係構築に貢献した。仏舍利分与は、独立した唯一の仏教国家としてタイの存在をアピールして、各国の仏教徒にタイに対する好意的な印象を形成することができた。

仏舍利分与は、タイ・日間の親交を深めるチャンスであったが、日本では仏舍利をめぐる日本仏教界の利害の対立から大混乱が生じた。日本の仏舍利奉安は、募金と政治目的のためであったとタイ政府は理解し、複雑な思いを生じさせた。しかし、チュラーロンコーン王は仏舍利分与が日本の仏教振興に寄与できたことを確信した。仏舍利をめぐる日本仏教界に混乱が生じて、日本との関係は良好で揺るぎないものとなった。

日本への三蔵寄贈は国交開始後のタイ・日間の文化交流の原点であった。それは、さらに仏舍利分与によって促進され、両国の関係は飛躍的な発展を遂げたのである。仏舍利は仏陀そのものの

であり、三蔵はその教えであり、両者は仏教徒が最も崇拝しているものである。タイ政府による仏教の代表的な宝物の諸外国への寄贈は、単なるタイという国家の存在、文明や技術のノウハウをアピールしただけではなく、通常的外交では不可能な領域を切り開き、予想以上の成果を挙げることができた。仏教交流はタイ・日両国民のこころをより接近させ、タイ・日間の友好関係を強化する役割を果たしたとすることができる。